

心に効く薬をあなたに

松本 侑壬子・ジャーナリスト

母と娘のテーマは、世界共通だ。例えば、強い母と弱い娘。娘を柔らかく包み込めない母と、そんな母に反発したり心を開けない娘。最近の映画では、かつての“母もの映画”のように娘のために人生のすべてを犠牲にして、その代り娘の幸せ（たいていは“玉の輿”）で苦労が報われたとする母親像は流行らない。

逆に、強い母親が老いて（多くは痴呆症で）、成人した娘との力関係が逆転する過程での葛藤が描かれることが多くなった。この母、娘ともに切ない変化を、「すっかり変わってしまった」母親に複雑なまなざしを向ける娘の気持ちに焦点を当てるのか、変化を自然の摂理と受け入れて新しい母娘関係を結ぼうとするのかで映画の色合いはかなり違ったものになる。

メキシコのベテラン女性監督の手になる本作では、母親の変化＝衰えに背中を押されるように懸命に学び、自らも人の親として成長していく娘の姿が温かく描かれている。

母ララ（オフェリア・メディーナ）は、メキシコでも著名なアステカ時代の薬草研究者。薬草といえば、「魔女」を連想してしまうが、実際ララは独立心旺盛で、別れた夫とも自分が生んだ娘とも適度な距離を置いた、自由な一人暮らしで、“心に効く薬”の研究に没頭している。

娘ダリア（ウルスラ・ブルネダ）はシングル・マ

ザー。コミュニティ・ラジオのパーソナリティの仕事をしているが、経済的には自立できず、母に内緒で父にこっそり息子コスモの養育費を援助してもらっている。コスモの父親ルイスとは結婚の形を取らず週末に息子を預かってもらい、一人で映画を見に行ったり若い男の子を誘ったり。自由だがいつもだれかに頼りながら、漂うような生活を送っている。

娘とは対照的なしっかり者のララだが、ある日、夜中に見知らぬ男が部屋にいたと言ってダリアを驚かす。また、家の鍵がどうしても見つからない、とも。鍵はクッキーの容器の中から見つかったが、当の本人には覚えがない。単なる勘違いにしてはおかしいと自ら気づいたララは、自分の研究の整理をダリアに託し、病院で検査を受ける。診断は果たしてアルツハイマー型認知症だった。

自分が自分で分からなくなることの恐怖。認知症が進めばどうなるか。「誰かに依存する人にはなりたくない。病人ばかりの寂しい場所に行くのも、幼稚園児のようなりハビリも嫌。私をまるで荷物みたいに扱うなんて、誰にもそんなことをさせないでね」と娘のダリアに念を押す。そして自分自身のためにかつて研究した薬草を調査しようとするが、肝心の薬草の名前が思い出せない。ダリアは代わって探そうとするが…。

ダリアはララの親友から母の意外な素顔を知らされる。研究一筋の堅物だと思っていた母の女の人生。初めて心から母をもっと知りたいと願う。母の生き方こそ娘の心に効く薬。母との絆を信じてダリアの下した決断は…。

最後の誇りと老いの不安に揺れるララの表情。母を抱きしめる娘ダリアは、聖母のようだ。

『グッド・ハーブ』

メキシコ映画（120分）／マリア・ノバロ監督

